

## 第2回委員会での主な意見

### ○いじめ・虐待・暴力

- ・身体的暴力の禁止は浸透してきているが、暴言や面前DVなど、子どもたちを精神的に抑圧していくような暴力が今、非常に問題になっている。
- ・親も教師も非常にストレスを抱えつつ、子どもに対しての過剰な叱責や指導によって子どもが追い詰められているという実態がある。
- ・エデュケーショナル・ハラスメントと言われる行為は、加害者側が人権侵害を自覚していない。むしろよかれとしてやっていることが多く、心の傷ついた子どもが抗議をしても、被害者側の子どもはセカンド・ハラスメントを受ける可能性が非常に高い。
- ・加害者側が人権侵害行為に気づくためにも、そういう専門的力量を持ったスクールソーシャルワーカーやオンブズパーソンが、いわゆる調整活動としてこの問題を解決していく道を考えていくのが重要ではないか。
- ・被害が出てからの救済も重要だが、無意識の加害に気づかせることのできるような啓発など、予防の視点も非常に重要である。
- ・低学年のいじめも増えているが、幼児期から低学年の子どもたちに権利を伝えていく方法を工夫する必要があるのではないか。
- ・虐待や暴力については、加害者を治していくプログラムも、子どもが安心して過ごしていくために重要だ。

### ○子どもからの相談／子どもの権利擁護機関（オンブズ制度）

- ・子どもは基本的に相談をしてこない。現場にいる大人がそれを気づくことが必要であり、学校や、放課後の居場所の職員など、子どもと身近に接している人たちのエンパワーが必要だ。
- ・オンブズは万能のものではなく、特に相談機能については弱い。学校やその他の時間帯に子どもに関わる人をエンパワーしていくことが重要。オンブズは、身近な人に相談できない子も中にはいますし、内容もありますので、そういったときに受けとめる機関というところの機能かなと思っています
- ・ボランティアが子どもの細かい様子などに気づいたとき、支援機関にそれを伝えて、その先にはオンブズ制度もあるということであれば安心できる。その縦のつながりの仕組みがあるといい。
- ・障害のある方の場合、そもそも言葉がうまく出せないという方もいる。SNSとか、いろいろ形で本人の意見を酌み上げるということも重要だが、本人にかかわっている人たちが本人の意をくんで発する声を聞くことも必要だ。また、オンブズの立場にある人が、客観的状況を調べてそこに介入していくような、一定の権限を持つことも必要ではないか。

- ・ オンブズ制度で重要なのは、個別の救済に関する権限や立場をきちんと付与することであり、そこがないとうまく機能しない。
- ・ いじめの重大事件が発生した時の第三者による調査を、子どもの権利擁護機関が担うことが望ましい。
- ・ 身近な関係の中で子どもが初めて相談するというのは、居場所型の相談救済事業として今、だんだん広がってきているが、もう一方で、匿名関係の中だったらしゃべれることもある。一般的に子どもたちが相談に乗れる仕組みと、身近な人間関係の中で相談ができるということとの両方が大事だ。

#### ○学ぶことのできる場（不登校・学習支援）

- ・ 教室に入れない子、学校に行けない子たちで学びたがっている子たちもいるが、最終的には学校復帰ではなく社会に出ていくということを見据えて、学びの機会をつくっていくことも大きな課題である。
- ・ 地域で学習支援のボランティアをしていると、いろいろな子どもがいて、いろいろな学びの形があることに気づく。また、家庭のことなどをさりげなく話してくれるのを聞く機会もある。
- ・ 学校に行けない子どもが、どういうふうに学力を上げていくかということについては、ボランティアだけで補うのは限界がある場合もある。
- ・ 例えば私立を選択する子もいていい、公立学校を選択する子もいていい、学校に行きづらい子もいていい、ただその子たちはみんな同じ学ぶ権利を平等に持って生きているんだということを、保護者や地域の大人たちが理解することが必要で、その視点を条例に含めたい。

#### ○関係機関の連携・支援者への支援（・地域）

- ・ 知らない人についていけない、という安全面の教育が浸透している一方で、地域と子どもとの関係不全が深刻になってきている。
- ・ 家庭や学校の不完全な部分をカバーすることができるのが地域ではないか。条例でも、地域で家庭や学校あるいは子どもたちを支援していく仕組みの一つとして位置づけていくべきだ。
- ・ 地域の高齢者などにもっと協力してもらえる部分もある。学校と地域で、もっともっと密になって話し合ったり、子どもの情報を共有したりしたほうが良い。
- ・ 学校が相談できるスクールロイヤー制度を検討するのであれば、モンスターペアレント対策みたいなものではなく、子どもにとって何がいいのかを一緒に考える、子どもの最善という視点で考えていく必要がある。